

中山間地域の過疎集落における 住民の生活環境と地域共同体の調査研究

－ 愛媛県西条市大保木地区 －

近藤 章太郎

キーワード：中山間地域、過疎、生活環境、地域共同体、高齢者、集落維持、フィールドワーク

1. 研究の背景と目的

今日、日本の中山間地域の集落の多くは、高度経済成長期以来の過疎状態を回復できずに消滅しつつある。国土計画や環境保全のためにこれらの集落の維持が必要とした国は、定住促進政策などの対策を講じてきた。その中で報告されてきた研究の多くは、集落維持のための活性化論調か、集落構成員のほとんどが高齢者であるという実態を踏まえた上での撤退論調であった。

中山間地域はその地形上生活条件が不利とされているが、当該地域にある大保木地区での初回フィールド調査で筆者が発見したのは、山の暮らしは楽しく、何の不便も問題もないとし、街の生活を頑なに拒否する高齢住民の姿であった。本研究は、中山間地域に住んでいる人々が、自らの生活環境や地域共同体をどのようにして維持しているのか、その仕組みをフィールド調査の中で把握した実態を基に分析し、そこから集落維持のためのヒントを獲得することを目的としている。

2. フィールド調査を通しての発見

- 畑仕事や病院通いで日々を忙しくしている住民の自立的な生活がある。その中で、多くの住民が不安に思っていると語った、獣害や緊急時（火事、急病）への対応が、今後の大保木地区の課題として抽出された。しかし住民は、生活できないほどの問題は何もないことを語り、その暮らしを支えているものの一つに血縁関係者によるサポートがあることがわかった。
- 同地区には空き家が多く散在しているが、家主と血縁関係者と移住希望者の間の需給関係が崩壊していることがわかり、血縁関係者以外の空き家の利用は現在困難であることがわかった。
- 同地区の主要施設では活発な地区活動を楽しむ住民たちの姿があった。この活動を支えている主要施設のスタッフは、地区内に住んでいない旧住民や外部者であることがわかり、彼らは「街の家から山の職場に通う」という形を取りながら、住民に準ずる存在として同地区内で生活している。

3. 結論

これまで、集落の維持のためには新しい定住者が必要とされてきたが、大保木地区の事例を分析し、空き家の活用が困難で、外部者の定住が難しい環境では、「街の家から山の職場に通う」という生活スタイルを確立することでも集落維持に寄与できる可能性がある、という知見を得た。